歴史探訪

斜面環境
谷戸の記憶

中村三郎
なかむら　さぶろう
防衛大学校名誉教授
（財）砂防・地すべり技術センター 理事

1
はしがき

三浦半島から都区内へ出かける折、頻度はげしく京浜急行電鉄を利用している。東京湾岸を走るこの鉄道は、すぐそばまで山稜や台地が迫り浜辺の広がりもない。堀の内駅から追浜という駅までのわずか17分の間に13ものトンネルをくぐる。長さ100～300mそこそこのこれらのトンネルは、谷戸（やと）地形の尾根部分をブチ抜いたものであり、トンネルと平地が繰り返される車窓の風景は目まぐるしい。

身辺でよく合唱組曲「横須賀」の歌詞（栗原一登）★1を聴く。そのなかに次のような歌詞がある

じいちゃんのそのまたじいちゃんと
ばあちゃんのそのまたばあちゃんが
好いて好かれた昔の話
いせき娘のばあちゃんが　ひとり
谷戸の山越え訪ねてゆけば
じいちゃんのそのまたじいちゃんが
海から小舟で送ったそうな

昔の恋物語を描いたこの詞は、三浦のリアス式海岸の湾入と谷戸の様子を、まことに手際よく表現している。トンネルのない当時、いせき娘は尾根を越えて恋人を訪ね、恋人は海に突き出た尾根をまわって小舟で送った様子が見事に詠われている。

地殻変動に伴う地盤の昇降や、気候変化に由来する海水位の沈水・離水作用は複雑なリアス式海岸をつくるが、三浦や湘南地方はほとんどそのままの姿で尾根や入江が保存され、谷戸の地形と谷戸周縁の急傾斜地形の発達が顕著である。今も昔も地域の人々は地盤条件・斜面環境を素直に受け入れ、それに適応した生活をつくりあげている。とりわけ青少年の頃自然のなかで繰り返し経験する行動や修得した感覚は、長じて後の行動に大きな影響を与えていると考えられる例がある。

2
流人生活の記憶と着想

源頼朝は義朝の第三子として出生した。1159年（平治

元）12月、挙兵した義朝は平清盛に敗れ、東国をさして敗走の途中殺され、頼朝は雪のなか平氏に捕らえられた。京都で斬首されるところを池禅尼（清盛の父忠盛妻）のとりなしにより一死をまぬがれ、1160年伊豆韮山の蛭ヶ小島に流されたことはよく知られている。20年後の頼朝挙兵までの長期間、この韮山において流人生活を送ることになる。

彼の生活ぶりは内心はともかく、外見的には至極神妙に流人生活を送っていたため周囲の承認を得、異例の自由さのなかで日々を過ごしていた（若命、1979）★2。2～3人の郎党と下人が従うだけの流人生活であるが、狩猟や遠乗りを通して韮山・伊豆・相模等の在地武士達との交遊を深めることもできた。伊豆・箱根といえば言わずと知れた天下の険、累々たる火山性砕屑物や火山溶岩、加えて相模湾沿いの谷戸地形や崖の連なりなど、青年頼朝にとっては格好の鍛錬の場であり、また地域の人々の生活と自然との関わり等についても理解を深め得たものと考えられる。

1180年（治承4）8月17日頼朝は平家打倒を期し挙兵した。しかし力およばず8月24日、石橋山の合戦に敗れ安房国（千葉県）へ逃れた。安房国へ逃れた後20日にして陣容を立て直し、下総国府（市川市）の台地へ進出し武蔵野進出をねらった。鈴木（1989）★3によれば「武蔵野台地側には秩父流平氏の一族江戸太郎重長が居すわっていたため、容易に渡河を決行できなかった。頼朝は約半月以上下総国府で足止めをさせられた。しかしその間に江戸川・隅田川上流に渡河地点を見い出し、千葉氏の舟団を用いて一挙に渡河して武蔵野台地へ入った」とある。

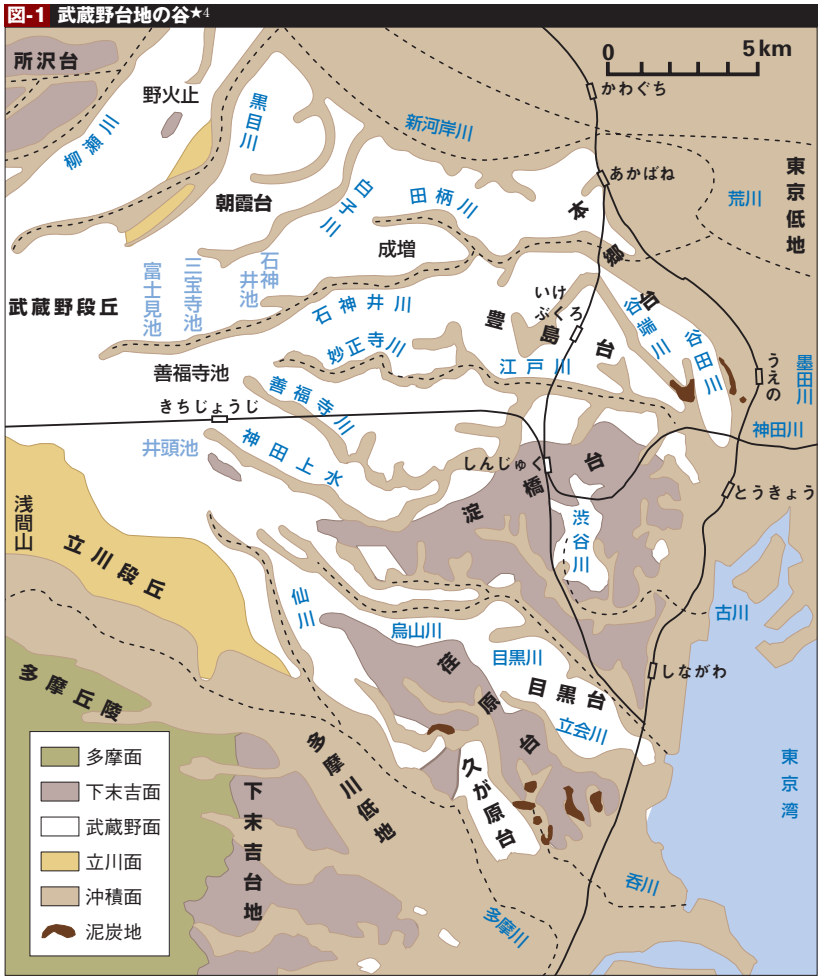
台地といえば平坦なイメージがあるが、広域な広がりをもつ武蔵野台地は多数の谷によって刻み込まれ、大小の河川による開析谷が樹枝状に発達し複雑である。これらの谷すなわち谷戸（溺れ谷）地形は、およそ6000年前の温暖期、奥深い入江だったと考えられている★4。

谷の多くは川の堆積物による埋積谷で大小の沖積低地である。谷戸地形と背後の台地周縁には、縄文～弥生時代以降の遺跡が到るところに分布し、往時の人々は谷筋・川筋に沿って生活していた。中世以降、湧水に恵まれた谷戸の谷筋は主要な生活の場で、台地は未開な部分でせいぜい狩猟の場であったと考えられる。谷頭部の湧水付近には権力者（もっとも古い居住者等）、その全面の谷地に権力者の地縁・血縁よりなる一族郎党が居住し、それぞれの谷戸地域を確保し固めていた図-1。

当時頼朝は、武蔵野一帯を征服通過し早急に鎌倉へ入る必要があった。そこで彼は各谷戸の征服・支配にあたり、次のような戦術を繰り返したという。谷戸の入口からのアプローチは容易だが、谷戸低地帯内の一族郎党に行動を阻止され時間をついやすことが当然考えられる。そこで彼は、当時台地は未開なところが多く、行動に多少困難性があったが、谷戸背後の台地を行動し、谷頭部に位置する権力者を一気に強襲・説得し一族郎党を服従させ支配するという手法である。

この戦術はかなり効果的で、10月2日に敵前渡河後わずか4日の10月6日に鎌倉入部という快挙を成し遂げ、短

図-1 武蔵野台地の谷★4



武蔵野台地を開析する谷と川、各地形面（下末吉・武蔵野・立川）の高さの異なる面の境（各地形面の基底礫岩層の部分）や谷の崖からは清冽で豊富な湧水が認められる。

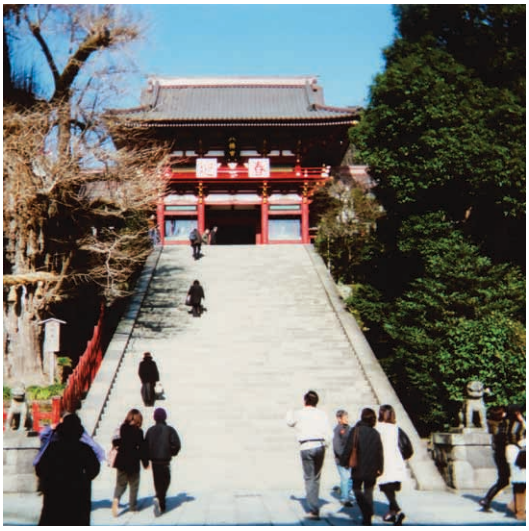


写真-1 鶴岡八幡宮　1191年の大火類焼直後、頼朝によって大臣山（大神山）中腹（境内の北を限る孤峰である）に造営再建された。谷戸地形谷頭部付近である。

図-2 衣笠城址付近（佐原西）の急傾斜地（中村・画）

期間の鎌倉入りを可能にしている。これも流人であった青年時代、伊豆･箱根･相模の険しい山野を跋渉した時の経験がしっかりと身心に記憶されていたこと、また、地域の人々の生きざまと自然条件に関わる深い認識が、その後の頼朝の戦術や戦略に生かされたものと考えられる。

鎌倉入部後、頼朝が本拠地として鎌倉を選んだ理由に、「要害地」・「御曩地」（由縁の地）という2つの要因があげられる。このことについては、彼が安房国に留まっていた頃、源氏の最長老である千葉常胤によってすでに献策を受けていたということである★5。鎌倉は三方山で囲まれ南だけ海という谷戸地形である。谷戸の性格を十分承知している頼朝にとって、限られた弱点をカバーすれば「自然の要害」として格好の場である。加えて西に近接する今日の寿福寺とその付近は、かねて義朝居館の跡であり源にとって由縁の地である。鎌倉の古都誕生にあたり、頼朝から父と呼ばれるほどに信頼されていた千葉常胤の献策と谷戸地形の意義は大きい写真-1。

最近の読売文化欄で「頼朝父祖の聖地鎌倉選ぶ」「天然の要害」説に異論、という岡本公樹（2007）★6の記事を拝見した。記事では「頼朝が幕府を開く場所として鎌倉を選んだ理由は、三方を山に囲まれ、正面は海という天然の要害だったというのが定説だが、これに対し斉藤慎一氏は近著『中世武士の城』（吉川弘文館）のなかで、異論を展開。当時の武家の思想に基づいた非軍事的で宗教的な『本拠』の設定だったとの新説を発表した」と紹介している。

岡本氏はこの異論にかかわる城や武家の本拠、聖地などについての考えを縷々披瀝、加えて考古学者の馬淵和雄氏、岡陽一郎氏の説を紹介、古都誕生の謎の解明はいまだ先のことであると述べている。門外漢の筆者にとって上記のことについて意見を差しはさむ余地はないが、地域の人々の生活と谷戸の問題は昔も今もなおかかわりが深い。

3
三浦の崖と鵯越え

過日、司馬遼太郎の『三浦半島記――街道を行く 42』★7のなかで、一ノ谷の合戦にかかわる次の文を興味深く読んだ。

「一ノ谷の上に鵯越という崖がある、山路を駆けてこの崖の上まできたとき、源氏の武者のたれもがひるんだ、足もとに大地がなかった。この時三浦党の佐原十郎義連が進み出て、こういう坂は何でもないことを具申した。（中略）鳥を追っているとすぐこういう崖になってしまいますと、義連は半島の地形と日頃の暮らしについてふれ『こんな鵯越なんぞは三浦の者にとって馬場です』といいまっさきに坂落ししたため、他の者もあおられてそれに続いた」

司馬はこう書き綴っている。

この文を読みながら、源義経が武具に身を包み急崖を下ろうとする勇姿を描いた絵本を、少年の頃見ほれてい

た時のことを思い出した。同時に義連の館跡は筆者の住所に近い佐原であることを知り、鵯越の坂（逆）落しと三浦とのかかわりを改めて認識し直した図-2 図-3 ★8。

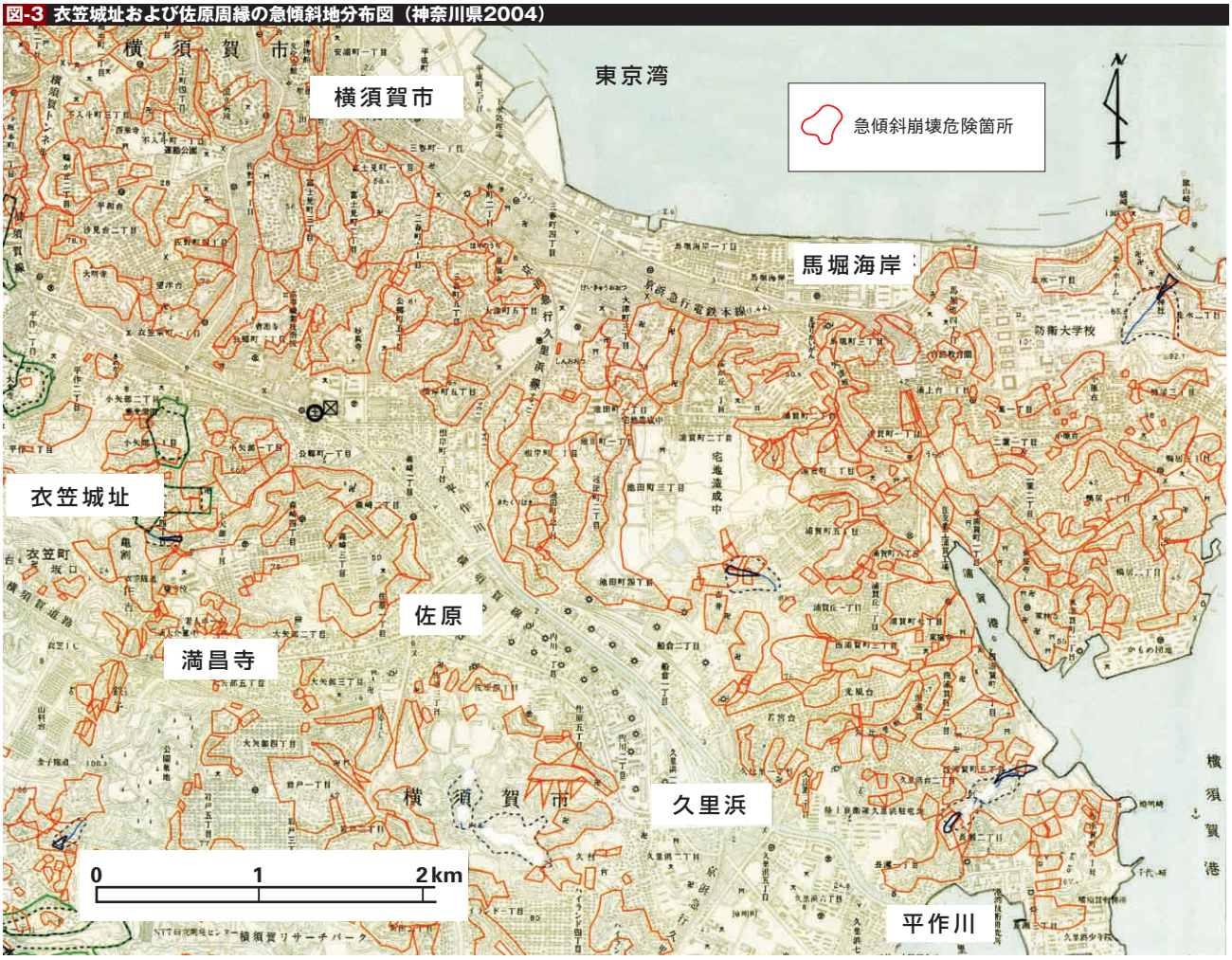
佐原十郎義連は三浦義明の7男である。三浦一族は頼朝挙兵に応じてこれを全面的に支援した。義連は義明の本拠衣笠城に隣接する佐原村に居住し佐原と名乗った。頼朝に仕え、寿永3年平家追討に際して義経に従い西国に赴いた。時に29歳・身の丈七尺五寸の偉丈夫であったと記録されている★9。

往事馬術は主要な軍術であり、武士の首領たるもの馬場を設け修練に励むのが常であったという。しかし、義連は改めて馬場など設けることなく、身辺の峻険な山野そのものを馬場となし、日々上下縦横に馳駆し馬と急崖斜面に親しんでいた。湯本（1996）★10は「東国武士の強さは馬にあった」と指摘している。すなわち鎌倉時代の馬は今日の馬とだいぶ異なり、平均の体高は約四尺（121cm）で、足も短く太くロバのような体形の馬であった。鎌倉における発掘調査の結果から、東国の馬は西国と比較して大きくたくましく、体高の平均は129.5cmであったという。優れた馬を産する東北地方が近いのも東国武士にとって有利でもあった。半野性的な逞しい馬を相手に、急崖だらけの環境のなかで培われた義連の卓越した馬術が、義経の騎馬による奇襲戦法に大きな役割を果たした。

上記坂（逆）落しの場所については、古来論争の絶えない問題となっている。前述の司馬の記述では、「一ノ谷の上に鵯越という崖がある……」とある。筆者も鵯越は一ノ谷の直上部というイメージをもっていた。改めて坂（逆）落しに関する観光案内や史跡案内を見ると、その多くは一ノ谷説による解説が多い。

しかし、神戸市文書館源平特集11において近藤好和（2006）は、『吾妻鏡』や『平家物語』の記述によると、坂（逆）落しの場所は鵯越えであるとの説が根強いと報告している。ところがこの位置は一ノ谷東方8キロにあり、離れすぎているとの指摘がある。筆者は鵯越の地名に惹かれ、長田区鵯越をたずね周縁の山野を歩き回った

図-3 衣笠城址および佐原周縁の急傾斜地分布図（神奈川県2004）



ところ、東里山町の山野井児童公園内に「源平の合戦で源義経が行った“鵯越の逆落し”の古戦場はこの一帯であると云われている」（神戸市長 宮崎辰雄 写真-2 図-4）という記念碑が立っていた。

一方、一ノ谷にも合戦を偲ぶ各種の記念碑や施設が見られるが、いかなる言い伝え・史実に由るものか筆者には判断できない。さまざまな史料や言い伝えの信憑性はとにかく、義経の「逆落し」の場所を鵯越えであるとする「鵯越え説」と、須磨一ノ谷であると考える「一ノ谷説」の二つに分かれての論争は当分解決しそうもない。

鵯越えから一ノ谷にかけては、六甲断層系の須磨・高取・横尾・丸山等の各断層が関与する峻険な断層地形が発達している。加えて、中世の約1000年～1300年にかけては、住（2005）★12によると気候は温暖な時期に相当し、海水位は今日よりやや高かったということも考えられる。さらに古い時期の約5～6000年前は沈水海岸も発達し、須磨区・長田区北部の一部には谷戸地形も発達した。断層と谷戸由来の地盤は今も昔も急崖・急斜面だらけである。三浦の中心であった衣笠城址からみる周縁の景観と、鵯越・一ノ谷周縁の険阻な崖斜面は心なしかそっくりである。

時移り人変わり、中世の源平合戦の修羅場は、今日都市化の進展も加わり景観の変貌が著しい。いきおい人間の都合が優先する環境が現出しやすいこともあり、1969年には斜面の安心・安定のための「急傾斜地法」、さらに社会の変化に合わせ、2001年には「土砂災害防止法」が施行され、砂防事業が各地で遂行されている。兵庫における急傾斜指定区域をみると、その多くは須磨区・長田区西部の六甲断層山地と山麓部で、正に「坂（逆）落し」周縁地域の急傾斜地がその対象である 図-5 図-6 ★13。一方、谷戸・断層の卓越する神奈川三浦半島は、その全域に急傾斜地の発達が顕著で 図-3、首都圏にも位置することから、メガシティ化も加わり、急傾斜地対策に伴う砂防事業は、わが国でもトップの事業量を保つほどの斜面環境つくりが行われている。その昔義経・義連が、東国の悍馬で跳梁した坂（逆）落しの場はここだろうか？　な

図-4 鵯越周辺の地形図

図中児童公園内に『源平合戦の折の「鵯越の逆落し」古戦場』の記念碑がある。1969年以来急傾斜地対策が図中の各区域で実施されている。

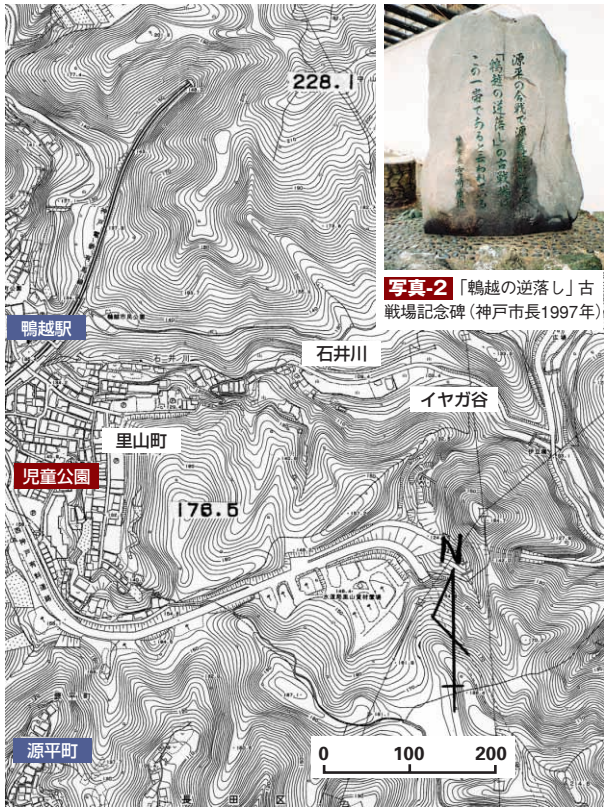
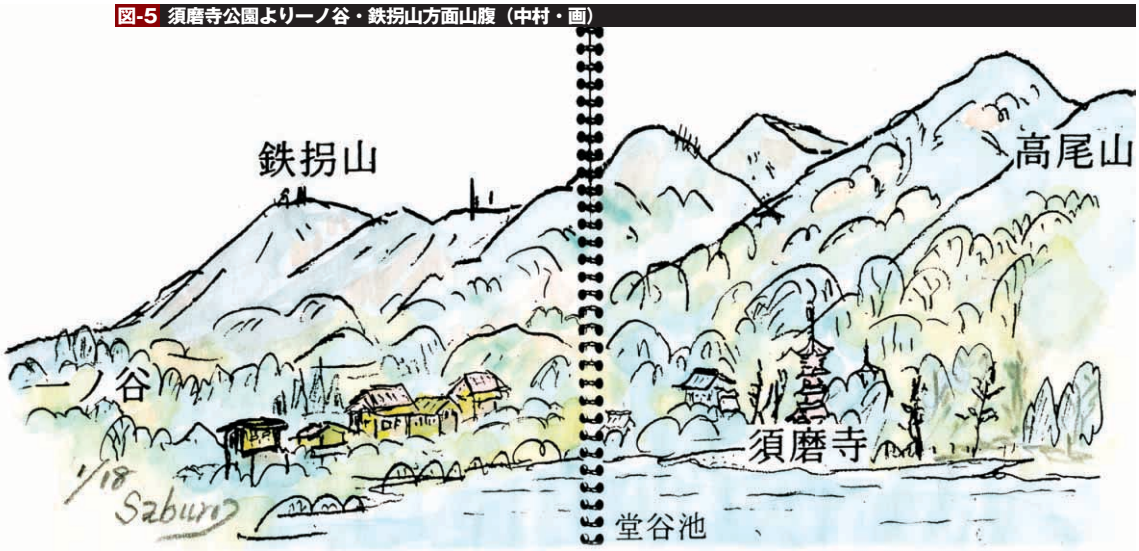


写真-2 「鵯越の逆落し」古戦場記念碑（神戸市長1997年）

図-5 須磨寺公園より一ノ谷・鉄拐山方面山腹（中村・画）



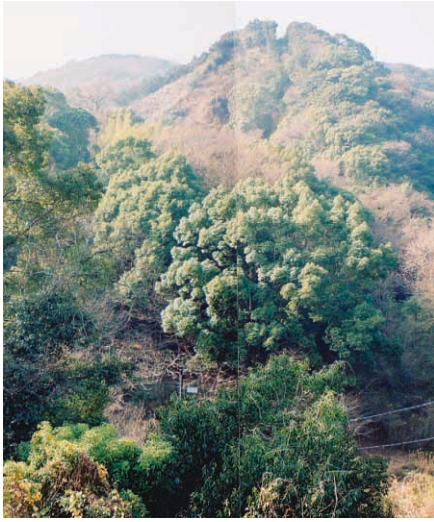
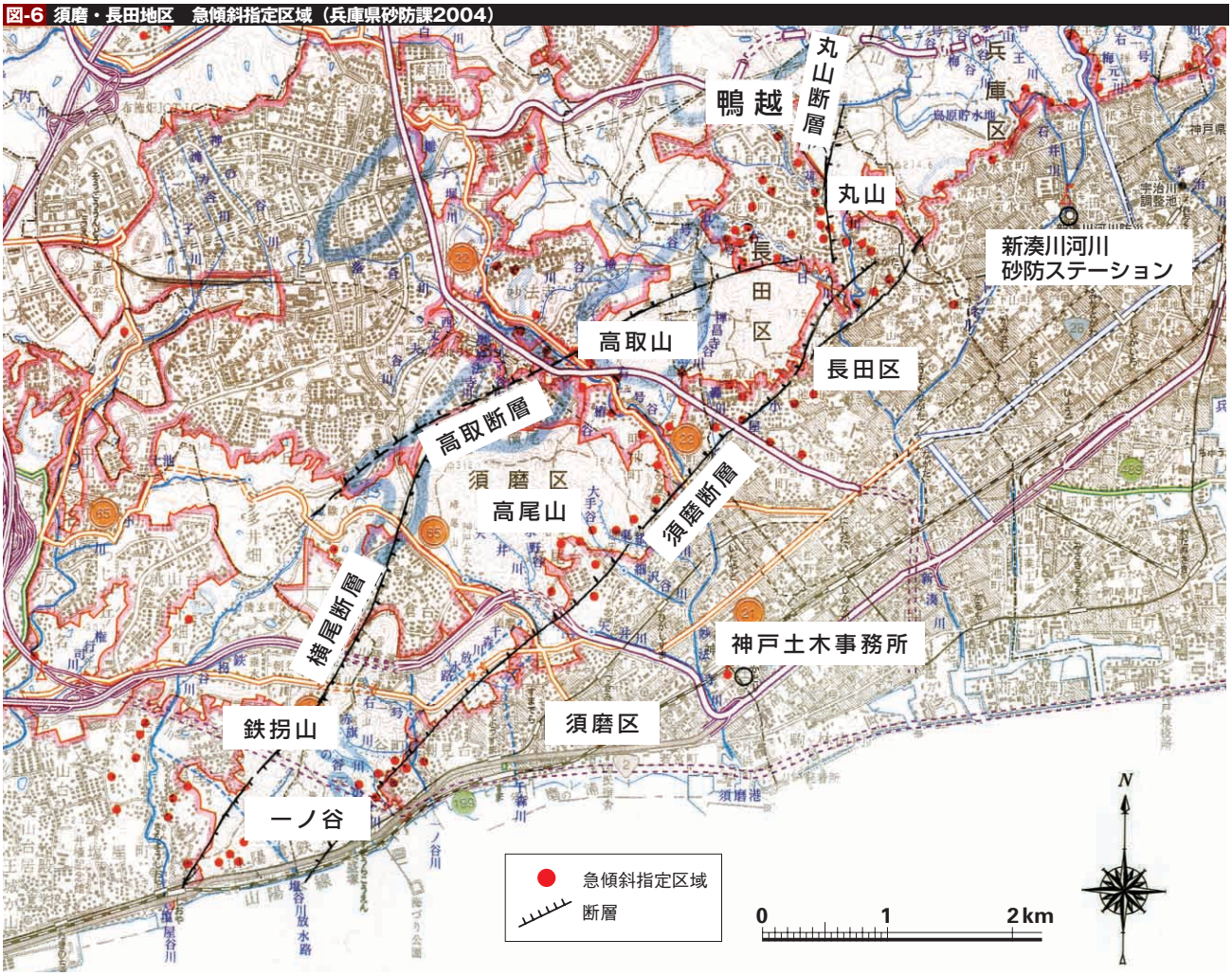


写真-3 鉄拐山付近の山腹斜面

図-6 須磨・長田地区　急傾斜指定区域（兵庫県砂防課2004）



どと、想いを馳せながら一ノ谷・鵯越・衣笠城址周縁の険しい山稜・山腹を跋渉し観察し歩いた 写真-3、感無量である。

4
地盤条件と推測

私達が認識している、歴史上の語り継ぎや事件・史跡など、往時の地球環境や地盤条件とかかわりの深い例がしばしば認められる。他方、史実には古来裏づけのない情報や宣伝のために誇張された情報に由来するものも考えられる。しかし歴史上の語り継ぎを聴き文献などを見たとき、土地や自然とのかかわりを見い出し対比ができると、その話題を素直に納得したくなる。わずかな情報と情報をつなぐのが推理であり、推理に必要なものは史観であるが、正しい史観をもち合わせていない筆者にとって、地形や地盤の変化と推理の整合性をどこまで追うことができるのだろうかなどと思うこの頃である。

謝辞

本小文の記載にあたり、資料収集などにおいて、大野宏之・後藤宏二・石尾浩市・森脇康仁・宮坂清志・市橋清功の各氏にご高配をたまわり、淵野修二・河村弘之の両氏には現地踏査等で終始お世話さまになりました。厚くお礼申し上げます。

★参考文献

1　栗原一登（1983）；合唱組曲「横須賀」、横須賀市
2　若命又男（1979）；北条政子、改造図書出版
3　鈴木理生（1989）；江戸の川・東京の川、井上書院
4　貝塚爽平（1974）；東京の自然史（増補第二版）、紀伊國屋書店
5　奥宮敬之（2001）；鎌倉歴史散歩、新人物往来社
6　岡本公樹（2006）；頼朝父祖の聖地鎌倉を選ぶ、読売（1月15日）文化欄
7　司馬遼太郎（1996）；三浦半島記一街道をゆく 42、朝日新聞社
8　神奈川県（2004）；土砂災害危険箇所マップ、神奈川県砂防海岸課
9　久里浜文化振興会編（1996）；佐原十郎義連とその一族、久里浜文化叢書9
10　湯本和夫（1996）；鎌倉謎とき散歩、廣済堂出版
11　近藤好和（2006）；http://www.city.kobe.jp/cityoffice/06/014/genpei/gassen/gassen0.html
12　住 明元（1998）；地球温暖化の真実、ウエツジ
13　兵庫県（2004）；急傾斜指定区域分布図、兵庫県砂防課